

縄文人と弥生人の動物観

西 本 豊 弘

はじめに	4. 動物絵画
1. 狩猟獣と家畜	5. イヌと人間との関係
2. 動物儀礼	6. イノシシ・ブタと人間との関係
3. 動物型製品	おわりに

論文要旨

縄文時代は狩猟・漁撈・採集活動を生業とし、弥生時代は狩猟・漁撈・採集活動も行うが、稲作農耕が生業活動のかなり大きな割合を占めていた。その生業活動の違いを反映して、それぞれの時代の人々の動物に対する価値観も異なっていたはずである。その違いについて、動物骨の研究を通して考えた。

まず第1に、縄文時代の家畜はイヌだけであり、そのイヌは狩猟用であった。弥生時代では、イヌの他にブタとニワトリを飼育していた。イヌは、狩猟用だけではなく、食用にされた。そのため、縄文時代のイヌは埋葬されたが、弥生時代のイヌは埋葬されなかった。

第2に、動物儀礼に関しては、縄文時代では動物を儀礼的に取り扱った例が少ないことである。それに対して弥生時代は、農耕儀礼の一部にブタを用いており、ブタを食べるだけではなく、犠牲獣として利用したことである。ブタは、すべて儀礼的に取り扱われたわけではないが、下顎骨の枝部に穴を開けられたものが多く出土しており、その穴に木の棒が通された状態で出土した例もある。縄文時代のイノシシでは、下顎骨に穴を開けられたものは全くなく、この骨の取り扱い方法は弥生時代に新たに始まったものである。

第3に、縄文時代では、イノシシの土偶が数十例出土しているのに対して、シカの土偶はない。シカとイノシシは、縄文時代の主要な狩猟獣であり、ほぼ同程度に捕獲されている。それにも関わらず、土偶の出土状況には大きな差異が見られる。弥生時代になると、土偶そのものもなくなるためかもしれないが、イノシシ土偶はなくなる。土器や銅鐸に描かれる図では、シカが多くなりイノシシは少ない。このように、造形品や図柄に関しても、縄文時代と弥生時代はかなり異なっている。

以上、3つの点で縄文時代と弥生時代の動物に対する扱い方の違いを見てきた。これらの違いを見ると、縄文時代と弥生時代は動物観だけではなく、考え方全体の価値観が違うのではないかと推測される。これは、狩猟・漁撈・採集から農耕へという変化だけではなく、社会全体の大きな変化を示していると言える。弥生時代は、縄文時代とは全く異なった価値観をもった農耕民が、朝鮮半島から多量に渡来した結果成立した社会であったと言える。

はじめに

日本人の動物観については、古代以降、文献を利用して様々に議論されている。江戸時代以降では、更に民俗誌的記載を用いて推測されてきた。そして古代以降、仏教の伝来や遣唐使などによる中国文化の流入、武士の発生、江戸幕府による鎖国、明治維新の西洋文化の流入などによって、日本人の生命観及び、動物観が様々に異なってきたことが知られている。

ところが、文献資料のない弥生・縄文時代以前については、動物観に関する議論は、これまで殆ど行われていない。縄文時代は、狩猟・漁撈・採集経済を基本とする社会であり、約1万年続いた。その後、稲作農耕を伴う弥生時代に移り代わるが、狩猟・漁撈社会から農耕社会への変化は動物観について大きな変化をもたらした可能性が高い。そこで、ここでは考古学的資料を用いて、縄文時代から弥生時代への動物観の変化を考えてみたい。もっとも、ここでは哺乳類を主体に考え、鳥類は少し触れるに止めたい。魚類については、縄文時代・弥生時代共に大いに利用された資源であるが、魚類に関して動物観を示す資料が殆どないので、ここでは扱わないこととする。

なお、本論は国立歴史民俗博物館の共同研究『日本における基層信仰の研究』のうち「生命観—とくにヒトと動物との区別認識についての研究—」の1991年1月の研究会において発表したものをまとめたものである。

表1 縄文時代の時期別の陸獣最小個体数

動物名		時期	早期	前期	中期	後期	晩期	総計(%)
シ	カ		81(26)	251.5(39)	183.5(41)	682.5(39)	637.5(42)	1,836(39.3)
イ	ノ	シ	124(39)	265(41)	174(39)	632.5(36)	565.5(38)	1,761(37.7)
ノ	ウ	サ	9	8	12	78.5	48.5	156(3.3)
キ	ツ	ネ	1	5	1	22	21	50(1.1)
タ	ヌ	キ	60	36	44	103.5	70.5	314(6.7)
ア	ナ	グ	16	15	6.5	58	38.5	134(2.9)
カ	ワ	ウ		11	5	16.5	21.5	54(1.2)
テ		ン	7	7	3	16	19	52(1.1)
サ		ル	6	24	8	46	19	103(2.2)
オ	オ	カ	2	5	4	13.5	9.5	34(0.7)
ク		マ	3	6		9.5	4.5	23(0.5)
ム	サ	サ	3	4	1	44.5	40.5	93(2.0)
イ	タ	チ		1	2	11.5	10.5	25(0.5)
オ	コ	ジ	1		1			2(0.04)
ヤ	マ	ネ	1	2	0.5	1.5	1	6(0.1)
カ	モ	シ	4	7	1	8	3	23(0.5)
合	計		318	647.5	446.5	1744	1510	4,666
シカ	・イノシシ	(%)	64	80	80	75	80	77

1. 狩猟獣と家畜

a. 縄文時代

まずはじめに、縄文時代と弥生時代にどのような動物が利用されていたかを見てみたい。縄文時代の動物遺体を多く出土する遺跡の内容を集成したものが表1である。この表は、1990年の段階で、本州以南の地域で、シカまたはイノシシの最小個体数が10個体以上出土している遺跡を集成し、それを時期毎に合計したものである。遺跡毎の内容は原著論文を参照していただきたい（西本, 1991）。それによると、縄文時代はシカ・イノシシが主要な狩猟獣であることが明らかである。シカ・イノシシの出土量は遺跡毎に異なっているが、総計で見るとシカが39%、イノシシが38%であり、ほぼ1：1の割合である。ノウサギ・キツネ・タヌキ・アナグマ・サル・ムササビ等はそれぞれ1%～7%であり、意外と少ない。しかし、これらの小型獣は、遺物包含層を全て採集して水洗した場合には多く出土しており、従来の発掘では発掘時点での採集ミスが多いと思われる。従って、シカ・イノシシと同程度に捕獲されていた可能性が高い。その他のテン・イタチ・オコジョ・ヤマネコ・オオカミ等はそれほど多くは捕獲されていなかったであろう。カモシカは山地の遺跡では多く捕獲されたであろうが、筆者の集計した遺跡が貝塚を主体としているので、数量的には多くない結果となった。なお、これらの野生獣の他に、イヌも多量に出土している。

b. 弥生時代

弥生時代の遺跡から出土した動物遺体を表2にまとめた。これも、シカ・イノシシ類のいずれかが10個体以上出土している遺跡を集成したものである。弥生時代では、イノシシ類・シカ・イヌが多い。その中でもイノシシ類が最も多い。イノシシ類とシカの比率は遺跡によって異なるが、全体としては約4：1となり、縄文時代と大きく異なる事が明らかである。イノシシ類としたものは、野生のイノシシだけではなく、家畜のブタが含まれている。野生のイノシシが多い遺跡もあると思われるが、筆者が分析した大分県下郡桑苗遺跡と愛知県朝日遺跡では、イノシシ類のうち8割から9割はブタと推測された。すなわち弥生時代のシカ・イノシシ類の比率は、おおよそ家畜のブタ6、野生イノシシ2、シカ2の割合である。

表2 弥生時代遺跡出土のシカ、イノシシ・ブタ、イヌの最小個体数

遺 跡 名	シ カ	イノシシ ・ブタ	イ ヌ
佐賀県・菜畑遺跡	27	51	5
大分県・下郡桑苗遺跡	3	23	3
岡山県・門田遺跡	25	43	5
大阪府・池上遺跡	17	60	5
大阪府・恩地遺跡	5	24	6
大阪府・亀井遺跡	20	63	多量
愛知県・朝日遺跡	35	140	27

註 1. 動物遺体の多く出土している遺跡の中で、個体数を計算できる遺跡を選んだ。
 2. 朝日遺跡のデータは、昭和56年、昭和60年～平成元年の発掘資料によっている。それ以前の調査分は含んでいない。

ただし、これは弥生時代の拠点集落の例であって、その周辺の縄文人的生活を色濃く残す弥生遺跡では、おそらくブタの比率はもっと少ないと推測される。

鳥類については、縄文時代・弥生時代共に出土量はそれほど多くない。その違いは縄文時代ではキジ類・カモ類が主体であるのに対して、弥生時代ではカモ類が特に多くなる。この理由は弥生時代の遺跡が川辺や沼の近くに多い事から、カモを捕獲する機会が多くなったためであろう。弥生時代では、ツル・カメ・スッポンの骨がよく出土するのも同様の理由であろう。

2. 動物儀礼

a. 動物儀礼の認定条件

遺跡から骨が出ると、すべて「動物儀礼」であるという考え方がある。例えば、アイヌは動物や物品の全てに靈魂が宿っていると考えており、それらを捨てる時に儀礼を行ふ事が知られている。また、仏教の影響を受けて「針供養」等の、物に対する「供養」も一般的に知られている。これらの例から、貝塚で動物の骨が少しまとまって出土すると、「動物儀礼」とする研究者もいる。しかし、筆者はこれまでの貝塚の調査の経験から、散乱状態で動物骨が出土した場合には、「動物儀礼」とは考えず、出土状態に何らかの意図が見られる場合を「動物儀礼」と認定している。その意図を認定する条件は以下の通りである。⁽¹⁾

- (1) 頭蓋骨を伴うこと
- (2) 頭蓋骨・四肢骨等が複数、意図的に配列されていること
- (3) 骨に加工が見られること

この例としては、頭蓋骨に穿孔したり、骨を焼く事も含まれる。

焼けた動物骨は縄文時代の各時期に見られるが、ここで「動物儀礼」と認定するものは、食事に伴って焼かれたものではなく、意図的に焼かれた骨の場合に限る。

- (4) 骨に伴って何らかの区画・施設があること

例えば、石で囲まれる事、段を築かれた上に骨が置かれる事、土坑に骨が納められることなど。

これらの4つの条件のうち、2つ以上が観察される時は「動物儀礼」と認めている。

b. 縄文時代

縄文時代の動物儀礼を図1に示した。最も有名な例は、北海道東釧路貝塚（縄文前期）である。この貝塚では、イルカの頭を数個、後頭部を中心に配列したものと、吻端を中心に配置したものの2例が知られている。また、静岡県井戸川遺跡（縄文晩期）では、大きなクジラの骨を中心にして、シカとイノシシの頭蓋骨が数個ずつ円形に置かれていた。また、山梨県金生遺跡（縄文晩期）では、直径1メートル程度の土坑からイノシシの下顎骨が100個体以上出土した。その下顎

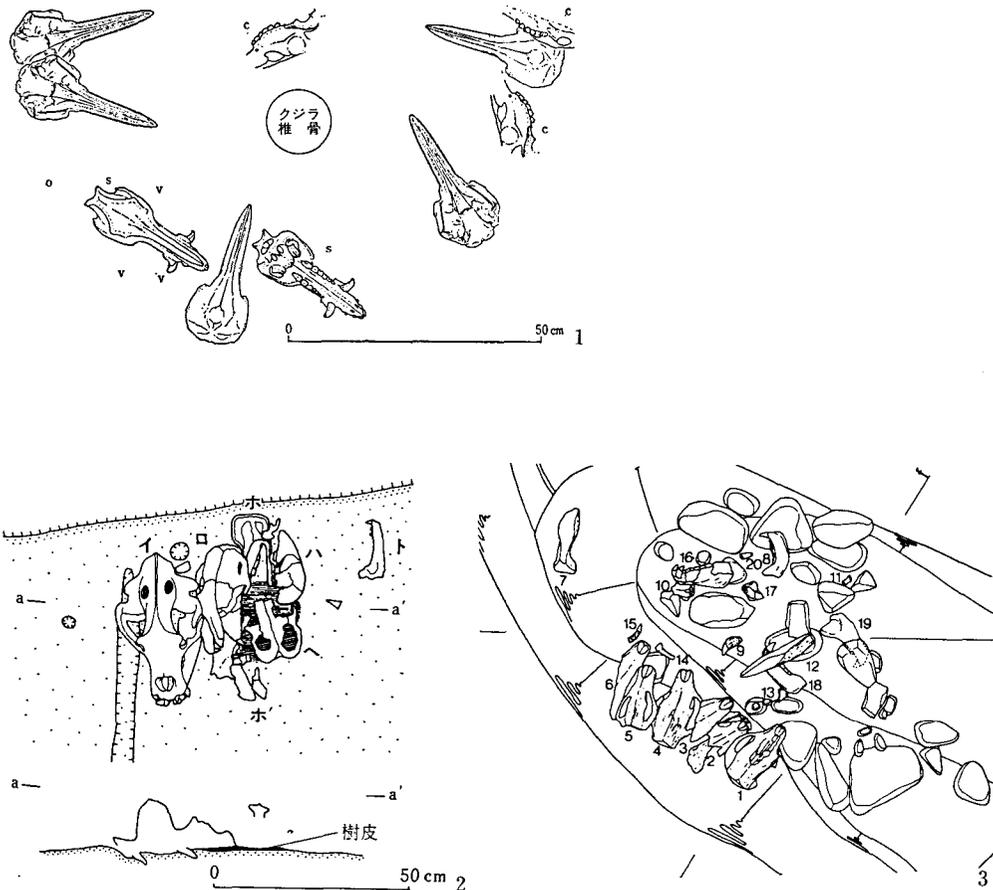


図1 動物儀礼の例

1. 伊東市井戸川遺跡（縄文晩期）のクジラ、シカ、イノシシの一括出土例
2. 礼文島香深井A遺跡（オホーツク文化）の2号竪穴住居床面より一括出土したヒグマとオットセイ頭蓋骨
3. 羅臼町オタフク岩洞穴（擦文文化）のヒグマ頭蓋骨一括出土例

骨は全て焼かれており、大部分は幼獣であった。

これらの3例以外にも、イノシシやシカの頭蓋骨・下顎骨が土坑内に1個ないし2個出土する例はあるが、それらの例を合わせても縄文時代の動物儀礼を示すものは10例程度であろう。これまでの動物骨の出土した遺跡が海岸部の貝塚に偏っているので、動物儀礼を示す事例が少ないのかもしれない。しかし、縄文時代は約1万年続いた時代である事から考えると、10例程度ということは、縄文人の動物に対する儀礼的取扱いは非常に希薄なものと言えよう。ただし、後に述べる通り、埋葬儀礼に伴った動物の特別な取扱いは縄文時代の後期・晩期に見られる。



写真1 弥生時代のブタ下顎骨(愛知県朝日遺跡)
下顎枝に穴があげられている。



写真2 佐賀県唐津市菜畑遺跡出土のブタ下顎骨
3個の下顎骨の枝部に木の棒が通されている。

c. 弥生時代

弥生時代の「動物儀礼」を示す物としては、佐賀県唐津市菜畑遺跡の例がある。ここでは、イノシシ類（ブタ？）の3個の下顎骨が、下顎枝に穴が開けられており、棒で連鎖された状態で出土した。これらの骨の周辺は少しくぼんでおり、そのくぼみから漆塗りの土器などが出土したと⁽²⁾いう。また、奈良県唐古・鍵遺跡ではイノシシの下顎骨11個が1本の棒に吊り下げられていたこと⁽³⁾を示す資料が出土している。これらの他に、弥生時代の遺跡ではイノシシ類の下顎枝に穴を開けられたものがよく出土することが知られている。それらは、菜畑遺跡の例と同様に、棒に懸けるために穴が開けられたのであろう。

一方、縄文時代のイノシシでは下顎骨に穴を開けたものは1例もない。従って、下顎枝に穴を開ける事は、弥生時代から始まった新たな「動物儀礼」を示すものと言える。このイノシシ類の下顎骨に穴を開けるという意味は、もし、それらが野生のイノシシであるとすれば、「狩猟儀礼」の可能性はあるが、ブタであるとする、その解釈は成り立たない。筆者は、稲作農耕に伴って大陸からブタが持ち込まれたと考えており、もしそうであるならば、農作物の豊作を願う「農耕儀礼」の一環と見るべきであろう。このブタの儀礼的取り扱いの意味については、農耕儀礼ではなく、「魔よけ」的な目的で行われたという意見もある（春成，1993）。

なお、これらのイノシシ類以外の動物では、井戸の中からイヌやイノシシ類の骨がまとまって出土した例が知られている。例えば、大阪府亀井遺跡では、2体分のイヌの骨が井戸の中から出土した。また、北九州市曲り田遺跡ではイノシシ類の若獣が1体分まとまって井戸から出土した。このイノシシ類については、展示品を見ただけで、手にとって観察したわけではないが、筆者はブタであると判断している。一般的に、井戸は弥生時代以降、本来の機能が終わった後はゴミ穴として利用されるので、それらのイヌやイノシシ類の骨が儀礼的取り扱いを示すものかどうかは疑わしいが、儀礼的取り扱いであった可能性も考えられる。シカについては、特別な取り扱いを示す例は弥生時代では知られていない。

3. 動物型製品

a. 縄文時代

縄文時代には、特別な動物の骨や歯を用いて装身具が作られた。例えば、オオカミ・クマ・キツネ・サメ等の歯牙に穴を開けて、垂飾品とした。また、オオカミでは下顎骨やけい骨に穴を開けたものもあり、ワシ類では末節骨（ワシの爪の骨）に穴を開けて垂飾とした。これらが装身具として用いられた理由としては、オオカミやワシ等の持つ貴重品性・威光性にあると思われる。また、イノシシ土偶は、縄文時代中期以降、約80個出土しているのに対して、シカ土偶は1例もない。また、イヌ土偶も少ない。

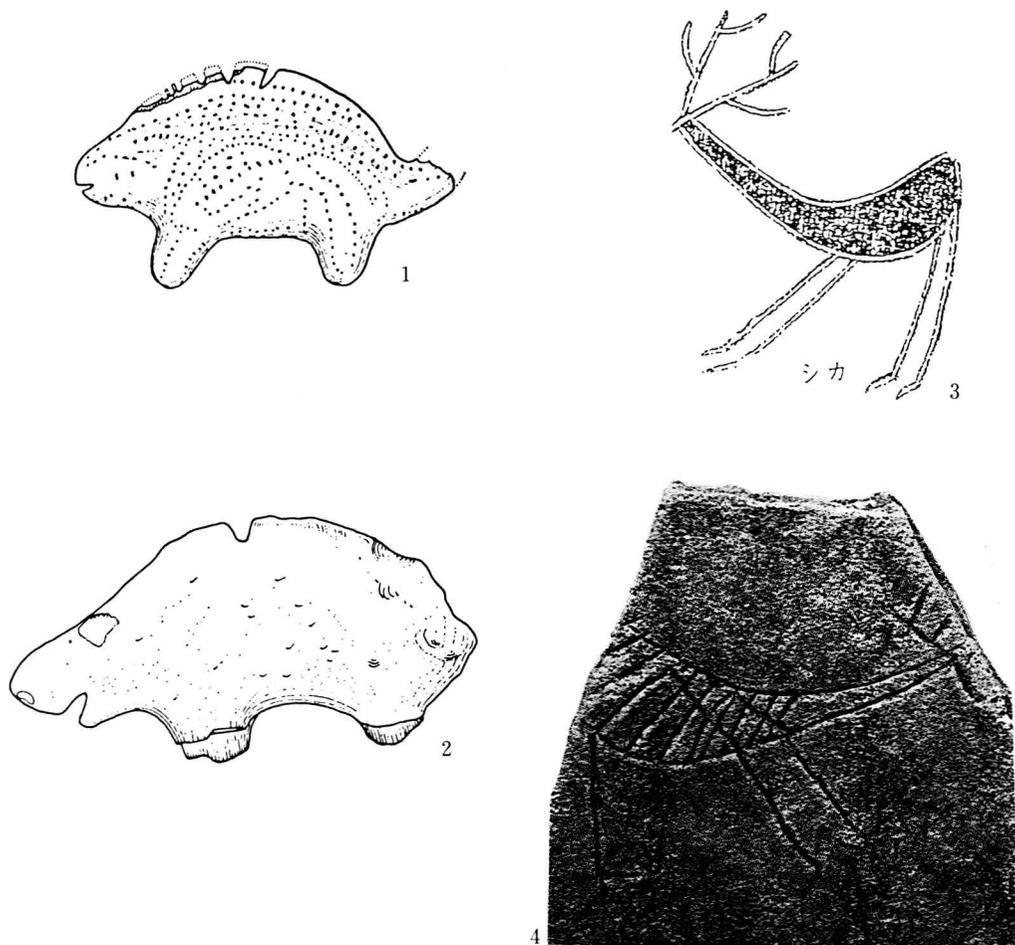


図2 イノシシ土偶（縄文時代）とシカの絵（弥生時代）
1・2. 岩手県貝鳥貝塚出土のイノシシ土偶 3. 東大阪市西ノ辻遺跡出土のシカの絵
4. 高槻市安満遺跡出土のシカの絵

b. 弥生時代

それに対して弥生時代では、オオカミやサメ等の歯牙等を利用した装飾品は殆どなくなり、曲玉や管玉になる。そして、イノシシ土偶はない。この様に動物型製品に対する縄文時代と弥生時代の差異は際だっている。

4. 動物絵画

a. 縄文時代

縄文時代では、動物絵画は殆どない。縄文時代一般に土偶を除いてヒト及び動物を型どったり描いたりしたものは少ないので、動物絵画が殆ど見られない事は当然かもしれない。

b. 弥生時代

それに対して、弥生時代では土器などに線刻が描かれる事が多く、その題材としてはシカが多くなる。また、銅鐸にヒト・カメ・ミズスマシ・ツル・シカ等が描かれている事もよく知られている。弥生時代は約500年と短いにも関わらず、縄文時代よりもはるかに多くの動物絵画を残しており、そのテーマも縄文時代がイノシシであるのに対して、シカを中心としたものに変化する。

この様な変化は、狩猟社会から農耕社会へと経済的に変化しただけでなく、その当時の人々の動物に対する価値観が変わった事を示していると言える。

5. イヌと人間との関係

a. 縄文時代

縄文時代のイヌは狩猟犬であり、人間と同様に埋葬された。後期以降にはイヌの墓は人間の墓と同じ場所に設けられる傾向が強くなる。イヌの骨には極く稀に解体痕があり、食料とされた事も推測される。しかし、縄文犬は狩猟時に怪我をするものも多く、背骨や肋骨が癒着したり、四肢骨が折れて治癒しているものも多く見られる。筆者の調査した例では、前肢の1本が折れてヒジの部分の地面に付けて歩いていたものもある。この様な骨折痕を持つイヌ達は狩猟犬として役に立たなくなった後も大切に飼育されていたと思われる。

b. 弥生時代

弥生時代になると、イヌは埋葬されたものもあるが、大部分は、バラバラの状態出土する。それらの骨の一部には解体痕が見られる。この様な状況は弥生時代以降、近年まで見られるもので、イヌは主に食用とされていたことを示している。

イヌの形質も弥生時代にはこれまでに存在しなかった前頭部にくぼみ（ストップ）を持つイヌが現れる。それらのイヌは狩猟から農耕へと経済基盤が変わった事による「縄文犬の変化」というよりも、朝鮮半島からの人の移動に伴って新たなタイプの弥生犬が入って来たと考えの方が自然であろう。

稲作社会では稲作に伴ってブタとイヌを蛋白質食料源として利用する事は中国大陸で多く見られた事であり、弥生時代に入って、稲作と共にイヌを食べる習慣が日本に持ち込まれたと言えよう。

6. イノシシ・ブタと人間との関係

a. 縄文時代

イノシシは本州以南に生息し、北海道には生息しない。ところが、北海道では縄文時代後期から晩期にかけて、道南部を中心にイノシシの骨が出土することが知られている。また、渡島半島南端の日ノ浜遺跡ではイノシシの子供を型どった土偶が出土している。これらのイノシシの骨及び土偶について、北海道の縄文人がイノシシ肉を食べる為に仔イノシシを北海道に連れて渡り、それを一時的に飼育したという説がある。筆者の調査した限りでは、イノシシは若い個体が多い事は事実であるが、成熟した大きな雄の個体も持ち込まれている。そして、これらのイノシシの骨が出土する遺跡の時期が、縄文時代後期の磨消縄文土器から晩期の大洞式土器までの時代に限られる。この時期には特に、墓に伴ってイノシシの骨がよく出土している。この事から北海道の縄文人は単に、イノシシ肉を食べるためだけに本州からイノシシを持ち込んだのではなく、縄文時代後期に本州で行われていた人間の埋葬儀礼が北海道へ伝来したために、イノシシも当地に持ち込まれたと思われる。つまり、その当時の埋葬儀礼ではイノシシまたはシカの骨を焼く行為が必要であったと推測される。

なお、イノシシは伊豆諸島にも持ち込まれている。本州近くの大島だけではなく、三宅島や八丈島へ縄文前期に持ち込まれている。それらのイノシシが島で野生でいた可能性がないとは言えないが、最近の大島での発掘事例では、小型のイノシシと大型のイノシシがあり、少なくとも大型のイノシシは本土のイノシシが大島へ持ち込まれたと推測される。伊豆諸島では、縄文時代に何度かイノシシが生きたまま持ち込まれ、それが野生化し、更にそれを縄文人が捕獲するということが繰り返されたと思われる。

この様に縄文時代では、イノシシはシカとは異なった意味を持っていた可能性が強い。狩猟獣としてはシカとイノシシはほぼ同程度の重要性を持っていたにも関わらず、イノシシ土偶があつて、シカ土偶がない、という事実は縄文時代におけるイノシシの特殊性に起因するのではなからうか。

すなわち、イノシシ型土偶についても、イノシシに対する畏敬性やイノシシの多産を願うためだけではなく、イノシシ儀礼に伴う何らかの意味を持っていたと推測される。

b. 弥生時代

弥生人のブタの解体の仕方は、定型化したものである。まず、頭蓋骨は正中線の部分で左右に打ち割られる。ナタ状の鉄器で割ったり、クサビを用いて割っている。そのため、弥生ブタの頭蓋骨は左右に分離したものが多く、これまで野生イノシシと弥生ブタの区別が困難であった理由は、弥生ブタの保存状態が、この様に左右に分かれた破片であったことも影響がある。この様な

頭蓋骨の破壊は脳髓を食べるためであるが、大後頭孔部分を壊す方法も少し行われている。これは、縄文時代に脳髓を食べるために行われた方法であり、弥生時代でも引き続き行われたことが分かる。

下顎骨については、外側中央部に縦方向の解体痕と下顎枝上部に横方向の解体痕が見られる。この横の解体痕は、下顎部分を支える大きな筋肉である咬筋を切断したときの痕である。これは、下顎を頭蓋からはずす作業であり、鉄器で行われたものである。この解体痕は縄文時代のイノシシでも稀に見られるが、弥生時代のブタでは大部分の下顎骨に見られる。下顎骨外側中央部の縦方向の解体痕は、目的が明らかではない。筆者がイノシシを解体する時もこの部分で頭部の毛皮を切断するので、同様に毛皮の切断のためではなかろうか。その部分より先は、毛皮と軟骨が残されたままで、廃棄かまたは次の解体処理に回されたのであろう。この痕も鉄器によって行われたものである。縄文時代ではこの部位には石器による解体痕は全く見られない。この様に頭蓋骨と下顎骨の解体痕から見た取り扱い方は、縄文時代と全く異なっている。

四肢骨については、縄文時代では99%以上が骨髄を食べるために壊されているが、弥生時代では破壊率は約50%以下であり、完存な四肢骨が多いことが特徴である。時には、同一個体の尺骨・とう骨が連結した状態で出土することがある。この様な出土状態は縄文時代では全くなく、弥生時代に肉をはずした後の骨が骨髄を利用することなく、そのまま捨てられた場合が多かった事を示している。以上に述べた弥生時代のブタの扱いは専門の肉屋が存在したのではないかと疑うほど定型化したものである。日常的にブタを殺して解体することが行われていた事を示しているのであろう。

おわりに

以上に述べてきた通り、縄文時代はシカ・イノシシ・ノウサギ・キツネ等を狩猟し、イヌは狩猟犬としての役割を担っていた。

つまり、縄文時代には、自然界の食物連鎖の一員として人間は位置づけられていた。それに対して弥生時代は動物のうち、イヌとブタを家畜とし、それを人間よりも下位に置いていた。すなわち、これらの家畜は「人間の為の動物」という観念にたち、野生獣とは別種の存在価値として考えられていた。つまり、縄文時代（アニミズム）的価値観から弥生時代（トーテミズム）的価値観への変化を読みとる事ができる。

この様な、動物に見られる価値観の変化は、単に農耕技術に伴ってもたらされたものではなく、それらの価値観を持った人々が大量に大陸から移住してきたという事を想定しなければならないであろう。

そして、この弥生時代的動物的価値観が、はじめに述べた様に、仏教や中国文化等の外来の様々な思想や文化の影響を受けて、これ以降、現代に至るまで様々に変化しながら、日本人の基本

的な動物観として継承されてきたと言えよう。

註

- (1) 動物儀礼に関する定義を佐藤孝雄氏がすでにまとめている。これは、筆者の見解に賛同した佐藤氏が、独自の見解を加えて公表したものである。佐藤孝雄1993「動物儀礼の「復元」と民族誌の利用」『新視点 日本の歴史1』新人物往来社、118～123
- (2) この3個の下顎骨は、取り上げる段階でバラバラになってしまったが、筆者が見た限りでは、いずれも下顎連合部と下顎底のなす角度が大きく、ブタとしてよいと思う。
- (3) 中島直幸氏の教示による。

引用・参考文献

- 金子浩昌他 1981 「大自然の中に生きる」アニマ96, 14～21
金子浩昌 1989 「金生遺跡出土の獣骨」『金生遺跡Ⅱ』山梨県教育委員会, 222～242
栗野克巳・永浜真理子 1985 「相模湾のイルカ猟」季刊考古学11, 31～34
高橋信武他 1989 『下郡桑苗遺跡』大分県教育委員会
高橋信武他 1992 『下郡桑苗遺跡Ⅱ』大分県教育委員会
中島直幸他 1982 『菜畑』唐津市
西本豊弘 1991 「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」古代91, 114～132
西本豊弘他 1992 「朝日遺跡の動物遺体」『朝日遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター, 207～212
西本豊弘 1992 「朝日遺跡の弥生時代のブタ」『朝日遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター, 213～242
春成秀爾 1990 『弥生時代のはじまり』東京大学出版会
春成秀爾 1993 「豚の下顎骨懸架」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集, 71～140
船越公威 1984 「曲り田遺跡出土の脊椎動物遺存体」『石崎曲り田遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会, 415～421
宮崎泰史 1982 「亀井遺跡のイヌについて」『亀井遺跡』大阪文化財センター, 205～230

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

Differences of Concept of Animals between the Jōmon People and the Yayoi People

NISHIMOTO Toyohiro

In the Jōmon Period, people subsisted on hunting, fishing and gathering activities; and in the Yayoi Period, also they practiced hunting, fishing and gathering. However, rice-crop agriculture occupied large share of all their subsistence. Their sense of the value of animals must have been different in each period, reflecting the difference in their subsistence. I will consider these differences by the study of animal bones.

At first, they had only dogs as domestic animals in the Jōmon Period, and these dogs were for hunting purpose. In the Yayoi Period, they kept pigs and fowls as well as dogs. In this period, dogs were not only for hunting, but also used for food. Because of this, the dogs in the Jōmon Period were buried, but they were scarcely buried in the Yayoi Period.

Secondly, regarding the ceremonial use of animals, there is little evidence left that they used animals in such ceremonial events in the Jōmon Period. On the other hand, in the Yayoi Period, they used pigs in some of the agricultural ceremonies. They used pigs not only for food, but also for animal sacrifice. Although the pigs were not always handled in ceremonial ways, a lot of mandibles drilled with a hole in the ramus have been excavated, and there were some instances where they were excavated in such condition that a wooden rod was sticking in the hole. Regarding the boars in the Jōmon Period, there is no instance where their mandibles had a hole. This way of treating the bones started in the Yayoi Period.

Thirdly, some dozen instances of wild boar-shaped clay figurines of the Jōmon Period have been excavated, but there were no deer-shaped clay figurines. Deer and wild boars were mainly hunted in the Jōmon Period and almost the same number of them were captured. However, the condition of excavated clay figurines shows a great difference. In the Yayoi Period, there are no wild boar-shaped clay figurines left, perhaps because the tradition of clay figurines itself disappeared. However, regarding the drawings on the pottery and Doutaku (big ceremonial bronze bell), deer are more usual than wild boars. In such ways, the craft works and design in the Jōmon Period and the Yayoi Period are very different.

Above all, I considered the differences in handling animals at three aspects between the Jōmon Period and Yayoi Period. When I note these differences, I conclude that not only the concept of an animal but also the value-judgment about how to deal with animals were different in the Jōmon Period from what they were in the Yayoi Period. It is reasonable to say that these differences show not only a change of subsistence from hunting, fishing and gathering to that of agriculture, but also great changes in the whole society. It is not too much to say that the Yayoi society was the result of

many agricultural people with totally different senses of value coming over to Japan from the Korean peninsula.